

「平成30年度特別企画展 バオバブ展」について

泉川康博・高井敦雄

はじめに

植物公園では、年に1度、自主企画の特別企画展を開催している。テーマは毎年変えており、今年度は大温室リニューアルの目玉として導入したシンボルツリーのバオバブにちなんで「バオバブ展」を開催した。導入したバオバブはオーストラリア産であるが、バオバブはアフリカ大陸やマダガスカル島にも分布しており、本企画展ではオーストラリアだけではなく世界のバオバブの実情について取り上げることにした。

広報について

期間中、多くの方にご覧いただきたく、両面カラー刷りのチラシを15,000枚作製し、市内の公共施設や中国地方の類似集客施設などに配布した。またホームページのトップページにバナーを設置し、チラシの電子版を掲載した。また、市民と市政2018年9月15日号にて展示会の告知を行った。また、今年度から始めた植物公園公式ブログにも、関連イベントの直前など計4回イベントの告知を行った。

チラシ・入口看板のデザインについて

チラシと看板は、デザインを統一する目的から、2016年度の「宮島の植物」以降、チラシデザインは担当者が内製し、同じデータを看板作成業者に渡している。当初は負担に感じることもあったが、ワードやパワーポイントの機能が以前より向上し、専門的なソフトウェアを用いずとも比較的に見栄えのするチラシデザインが可能になったことや、一般向けのデザインの参考書を参考にしたことなどもあり、写真さえ決まればスムーズなチラシ作成が可能になった。

今回の「バオバブ展」では、導入したバオバブの掘り上げに立ち会うために、オーストラリアのカナナラに赴いた際、現地で迫力のあるバオバブの写真が撮れたため、迷うことなくその写真をチラシの表面と看板に用いた。また、写真の次にタイトルに目が行くように、フォントと大きさ、背景色と余白に気を配った（写真1）。



写真1 展示室入り口の看板

協力者について

バオバブ研究の第一人者として著名な、進化生物学研究所の所長兼理事長、湯浅浩史先生に、さまざまな形でご協力いただいた。先生は40年以上にわたり、毎年マダガスカルに調査研究に赴いており、収集した貴重な標本資料や写真をご提供いただいた。さらに展示パネルの全文の校正と、講演会の講師就任をお願いした。

また、バオバブ移植プロジェクトで中心的な役割を担っていただいた薔薇園植物場様から、当園職員とともに現地オーストラリアで撮影したバオバブ動画や、別の機会にセネガルで撮影したバオバブの写真を提供いただいた。また、同じくバオバブ移植プロジェクトに取材で同行したテレビ新広島様からも大阪港から広島に運搬する際の静止画を提供いただいた。

章立てと展示室のレイアウトについて

今回の展示では、テーマが大きく2つに分かれている。前半では、オーストラリアバオバブの移植プロジェクトにスポットを当てて、この巨大なバオバブがどのようにして広島に来たのかを知っていただくこととした。後半は世界のバオバブの全般的な概要と直面する危機について取り上げることとした。

章立てにより順路が分かりやすくなる効果と、話題の転換がスムーズになる利点があると考えられ、前回の「毒と薬は紙一重」に引き続き、章立てすることとした。それぞれの章の頭には、2.2mの長幕を貼り、話題と転換と順路の案内を兼ねることとした（写真2）。今回は2つのテーマを以下の8章に細分化し、はじめとおわりにあいさつ文を加えた構成とした。章立てとかみ合わない話題は、トピックスとして紹介するこ

ととした。

- ・はじめに
- ・第1章 バオバブ移植プロジェクト ～オーストラリアから広島へ～
- ・第2章 気候とバオバブ
- ・第3章 バオバブ植物学入門
- ・第4章 バオバブ全種紹介
- ・第5章 バオバブの利用
- ・第6章 乾燥地を生きぬく
- ・第7章 バオバブの危機
- ・第8章 バオバブが登場する本
- ・おわりに



写真2 章頭の長幕とパネル・標本の展示

過去の展示会では、順路が分かりにくいという指摘があったため、章立てと合わせて展示室のレイアウトにも工夫をこらした。具体的には入口と出口を定めて一方通行とし、展示室を東西に2分割したうえで、展示室を西側の入口か

ら第1章を観覧しながら奥まで進むと行き止まりになり、向かいの壁面の第2章、第3章のパネル展示を見ながら戻ると展示室の東側に進める構造とし、自然な流れで順を追って観覧できるようにした(図1)。

動画の上映について

植物公園では、改修中で入室できない大温室の工事の様子をリアルタイムで来園者にご覧いただく目的で、平成28年度に55インチモニターを導入し、大温室内に設置した監視カメラがとらえた映像を映し出していた。改修工事が終了し、モニターを当初の用途では使用しなくなったため、これを企画展示の動画上映用に再活用することとなった。以前は動画をDVDフォーマット(720×480ドット)で作成し、37インチのテレビに出力していたが、55インチモニターではMP4形式でフルハイビジョン画質(1920×1080ドット)での再生が可能となり、大幅に画質が向上することとなった。バオバブの掘り上げや植え付け作業を撮影した動画を、パワーポイントで作成したスライドショーと組み合わせて、Windowsパソコン付属の動画編集ソフトで編集した。掘り上げが約17分、植え付けが約13分の長い動画となり、来園者が途中で飽きてしまうのではと心配したが、思いのほか熱心にご覧になる方が多いように見受けられた(写真3)。

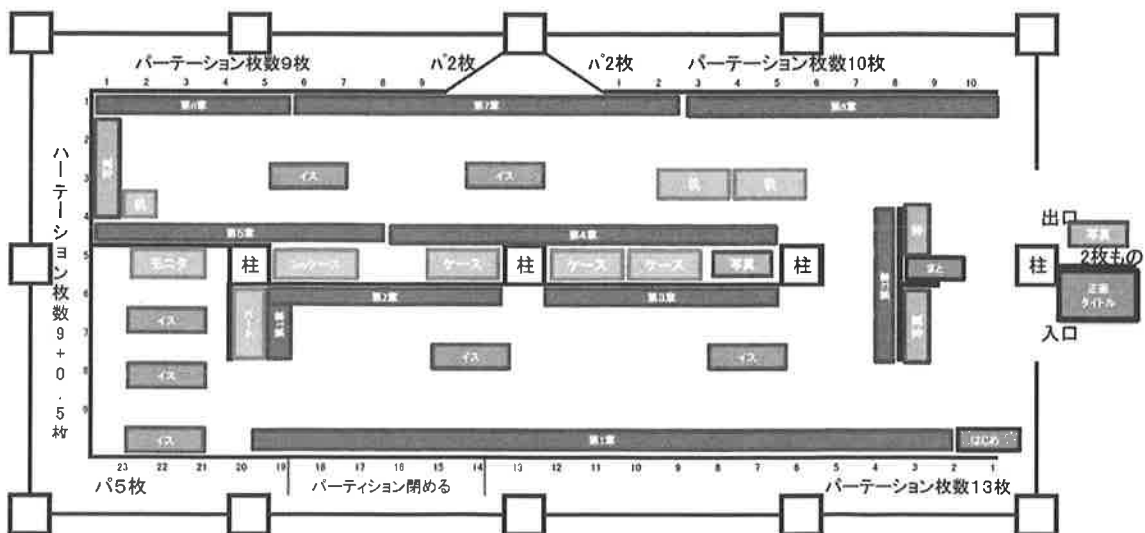


図1 展示室のレイアウト



写真3 動画「バオバブ移植プロジェクト」の上映

写真の展示について

来園者に、よりバオバブの迫力や魅力を感じていただく目的で、以下の3枚の写真を選び、A1サイズを大きく超えて引き伸ばした。

- ・掘り上げ直前のバオバブ 2.3m × 1.8m(写真1)
- ・カナナラ湖畔のバオバブ 1.8m × 2.2m(写真3)
- ・バオバブ街道に沈む夕日 1.2m × 1.8m(写真4)

具体的には、写真をロール紙に分割出力して、それを両面テープでつなぎ合わせるといった手法をとった。継ぎ目はそれほど目立たず、マット合成紙を使用したためテカリも目立たず、大画面による迫力を感じていただくことができたように思う。



写真4 大きく引き伸ばした写真の展示

上記以外ではA1サイズ(1枚のみB1)で計15枚の写真を展示した。9枚は額装したが、保護フィルムを写真の前面にすると反射で見にくく、光沢紙が露出するように額装してもテカリが目立ちやや見えにくいように感じた。また、紙面に凹凸が出来てしまった。6枚は額が足りず、印刷した合成紙をそのまま画鋏止めとしたが、

画質の高級感が物足りない感じであった。写真の展示方法については、今後課題を残すこととなった。

標本資料の展示について

進化生物学研究所より、非常に多くの標本資料の提供をいただけることになったが、さく葉標本や果実の標本、果実を使った工芸品など、破損が心配される資料が多く含まれていたため、美術品輸送の専門業者に梱包と輸送を依頼した。また、当園が通常の展示会で使用している横長展示ケース4台だけでは入りきらず、長年使用されず倉庫内で放置されていた高さ2mの大型展示ケース1台を補修・清掃し使用することとした。このケースは底面のほかに2段の棚板に展示品を乗せることができ、多くの資料を収納することができた。また、棚板はガラス製なので、下段まで照明がいきわたるようになっていた。ケース内の照明は紫外線波長を含まないLEDに変更し、標本資料の光劣化を極力防ぐようにした。また、展示室の蛍光灯も使用せず、主にLEDによるスポット照明とした(写真5)。



写真5 バオバブ果実の工芸品などの展示(2m大型ケースにて)

また、横長展示ケース3台を使って、バオバブ全9種の果実、さく葉標本、種子の展示を一堂に並べて展示した(写真2、写真6)。バオバブは大きな花が咲き、大きな果実が成ることをご存じでない方も多かったようで、興味をもっていたように思う。

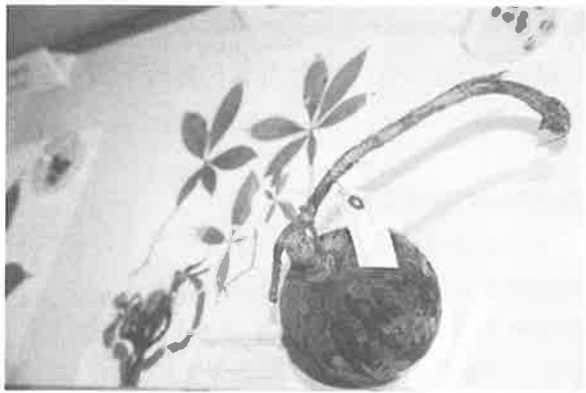


写真6 バオバブの果実や標本

残り1台の横長展示ケースでは、オーストラリアバオバブの自生地カナナラを訪れた際に職員が手に入れたお土産などを展示した。

職員によるイベントについて

展示期間中、職員によるイベントを3回実施した。

9月24日(月・祝)、「バオバブ担当者による展示解説」は、事前の広報不足もあり10名の参加であったが、参加者は熱心にパネル解説や資料の説明に聞き入っていた(写真7)。参加者にはバオバブクッキーをふるまった。

10月8日(月・祝)、「バオバブ導入責任者によるバオバブ導入秘話」は、28名の参加があり、関心の高さがうかがえた。導入の経緯などをスライドショーで紹介した。

11月17日(土)、「バオバブ栽培担当者によるバオバブ生育日記」は、17名が参加し、実際に栽培を担当している職員の秘話などを披露した。



写真7 バオバブ展担当者による展示解説

講演会について

11月23日(金・祝)に、進化生物学研究所の

理事長兼所長、湯浅浩史先生を招聘し、13時30分から講演会を開催した。講演タイトルは「巨木バオバブ、その謎と実情」とし、40年以上にわたり、毎年マダガスカルに調査研究に赴き、現地事情に精通している先生ならではの話題を提供していただいた。祝日とはいえ、金曜日ということもあり、客足が心配されたが、130名の方が聴講され、事前に用意したプリントや椅子が足りず、慌てて追加するなど、予想を超えた大盛況であった。九州や関西方面から聴講に来られた参加者もいらっしやうだ。参加者からは、話し方が分かりやすかった、現地のバオバブの実情がよく分かった、など多くの感想をいただいた。終了後、数名の参加者から活発な質問があった(写真8)。



写真8 湯浅浩史先生による講演会

総括

開催期間は9月22日から12月25日までで、総入園者数は、60,654人であった。

夜間開園で多くの入園者が見込める12月いっぱいまでの開催期間であり、なおかつ本年から冬季の夜間開園のコンサートを屋外ではなく展示資料館2F講堂で開催するようにしたため、多くの入園者が展示室の前を歩くことになり、たまたま通りがかりで入室いただく機会が劇的に増えたと思われる。それにもかかわらず、30分にもわたる長編動画を最後まで熱心にご覧いただく方が多く見受けられ、植物に関することの普及啓発に大いに貢献できたのではないと思う。

今回は、例年の特別企画展以上に質量ともに満足のいく展示とすることができたと思う。その要因として、1つには植物公園をあげての大事業となった大温室改修において、園の新しいシ

ンボルとなり、マスコミなどでも大きくとりあげられた日本一のオーストラリアバオバブに関する話題提供を特別企画展として紹介できたことが挙げられる。もう1つは、進化生物学研究所から多くの展示資料や写真の提供をいただき、湯浅先生にはパネル全文の校正までしていただき、学術的にもしっかりしたものを提供することが出来たことが要因である。

このように、質の高い企画展は、主催側が日々力を入れているオリジナル性が高い企画であることと、外部の頼もしい協力を得ることが両輪となって、初めて実現することを、改めて認識することとなった。今回の経験を活かし、さらに魅力ある企画展づくりに今後も励みたい。